非運命（１）

「運命」を信じているのは、何もロマンチストだけではない。

佐伯楡も「運命」を信じているが、それは自分の無力感を反映した世界観に基づくものだった。

人生はコリントゲームに似ている、と楡は思う。

発射された玉がこの穴に落ちるかは、最後の最後まで分からない。

しかし、玉に力を加えられるのは、最初の打ち出すときだけであり、その後の玉の行方は釘に弾かれるに任せられている。

楡の人生が進む方向だって、それが楡自身には予想できないだけであって、実はこの世に生を受けた瞬間にすべて決まっている。

コリントゲームにおいて、どの釘に当たってどの方向に弾かれるかが、打ち出された玉の軌跡、速度のよって物理法則的に決定されているのと同じように、楡が生涯において誰と出会い、その人物によってどの方向へと誘われるかは予定調和の下にある。

楡は決して「運命」の筋道から食み出すことができないのである。

そんな楡の人生観を覆したのは、ある少女との出会いだった。

２０５６年２月１０日、楡はその少女との「運命的ではない」出会いを果たした。

帰宅途中の楡は、JR千葉駅の上がり方面へと向かう電車に乗るためにホームへの階段を上がっていた。

足元ばかりを見ているので、回りの景色は一切入ってこない。視線と視点を下方に向かわせる猫背は、自身の鬱屈とした正確を餌として長年かけて築いたものである。

ホームに着いた楡はようやく地面から目を話した。電車の発射時刻を告げる電光掲示板を確認するためである。

しかし、空中の電光掲示板よりも先に目に飛び込んできたのは、水色のコートであり、そのコートを羽織った色白の少女だった。

少女は近くにいたわけではない。

ホームの最も端、車両の最後尾が到達する地点に立っていた。

楡と目が合ったわけでもない。少女の身体は線路の方を向いている。

楡が少女の近くまで歩いて行く理由はなかった。

楡はこれまで毎日そうだったように、階段を上がってすぐのところにできていた列の最後尾につく。

列に並び、電車を待っている間、楡は少女のことが常に気になっていた。

少女との距離は２０メートル以上近くあったし、少女は決してこちらを振り向くことがなかったため、楡は少女を見つめ続けることが許されていた。

自分の目に映る少女について楡は想像する。少女の目には何が映っているのだろうか。少女は何を感じ、何を思っているのだろうか。

鼻にかかった駅員の声が間もなく電車が訪れることを告げる。

少女を見ていられる時間もついに終わる。

楡が電車に乗り込めば、雑多な人混みに揉みくちゃにされることによって、無機質な現実に引き戻される。彼女と会うことはもう二度とない。

気が付くと、楡の足は勝手に動き出していた。

狭いホームで人を掻き分けながら、少女の方へと一直線で駆ける。

ホームの端に近くにつれて人の霧は晴れていき、ついに電車のヘッドライトを逆光に受けた少女の横顔が手の届くくらいの距離に来た。運動不測が祟り、これだけの距離を走っただけなのに肩が激しく上下している。楡の呼吸の音に反応して、少女が振り向く。

少女は西洋の人形を彷彿とさせるような彫りの深い顔立ちだった。

目鼻立ちがすっきりしていて、人間らしからぬ美しさである。肌も人工色のような透明な白であり、「実は雪女だ」と告白されても微塵も疑わない。

振り返った少女は、一言も発さず、ただ楡のことを凝視した。

この態度は正しい

状況的に考えて、先に声を掛けるのはどう考えても楡の役目である。

楡は急いで呼吸を整えながら、発すべき言葉を考える。

こういうとき、どう声を掛けるのが自然だろうか。

「あの……僕とお茶でもしませんか？」

楡にとって人生初ナンパだった。

もっとも、楡の誘い文句が少女に届いたかどうかは甚だ怪しい。

ホームに侵入した電車が発するけたたましい轟音によって、楡の声が完全に掻き消されていたかもしれない。相変わらず無言で楡を凝視している少女の態度はその可能性を示唆して余りある。もう一度話しかけなければならない。楡は繰り返す。

「あの……もしよければ僕と……」

「いいよ」

少女は低い声でそう言った。

「え？何が…？」

「お茶だよね、いいよ」

少女の返答は喉をほとんど振動させない低音だったが、おそらくこれは彼女の地声なのだろう。不機嫌な美少女がナンパに応じるわけがないので、不機嫌さの表れではないだろう。

自分で提案しておきながら、まさか少女からこのような返事が聞けるとは思っていなかったため、次のセリフを一切用意していなかった。

その間、停車した電車のドアが開く。

「とりあえず、この電車で移動しましょうか」

時刻はすでに１９時過ぎであり、冬の太陽はとっくに役目を終えている。少女を遠くに連れ回すつもりはない。おそらく少女は帰宅するためにホームで電車を待っていた。とすれば、この電車は少女の家の方面へと進むはずだ。

少女は頷くと、楡より先に電車に乗り込んだ。

楡は自分がとんでもないことをしてしまったことに気がついていた。間違いなく、この少女と楡は本来交わることのない位置にいる。

別々のストーリーのなかで人生を歩み、かつ、これからも歩んでいくべき２人である。

楡のしたことは、ドン・キホーテが突然白雪姫にチョッカイを出すようなものである。ねじれの位置にいる２人には、出会うきっかけも必要も理由も何もかも存在していなかった。

楡は突飛な行動によって、自分の運命はない出会いを果たしてしまった。

楡が自分の意志によって玉の行方を変えたのは、初めてのことだった。